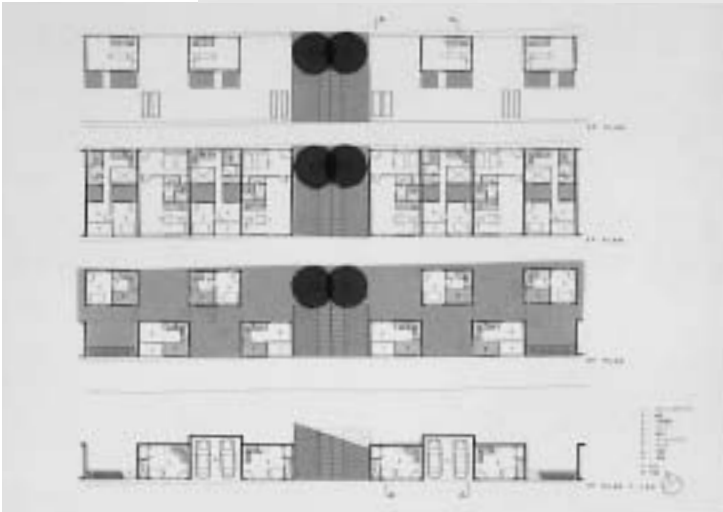
吉良　由紀子



建築設計製図Ⅱ

第１課題
集合住宅

２年１組

担当＝
若色　峰郎
片桐　正夫
野村　歓
小川　守之
白井　勇
曽我部　昌史
染谷　正弘

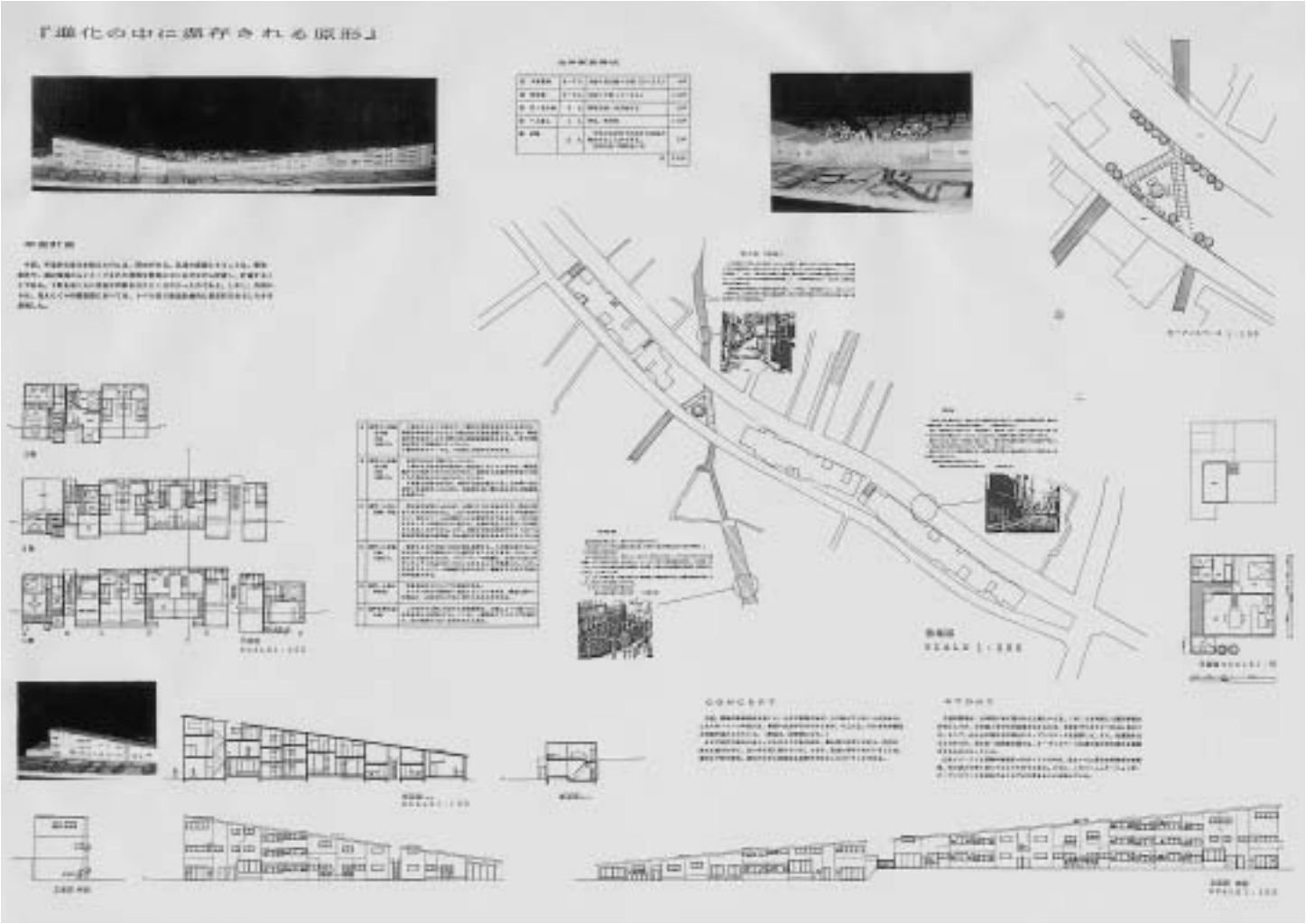
吉良　由紀子

この課題で、私はまず集合住宅の長所について考えました。そしてそれは集合住宅にしかない空間――コモンスペースであると考え、充実したコモンスペースを持つ集合住宅を目標として、課題に取り組みました。
道状のコモンスペースを敷地いっぱいにとることによって、どの住戸からも気軽にコモンスペースに出入りすることが出来るようになり、住人のふれあいの場となる空間を造り出すことが出来ました。

指導＝野村　歓

ウナギの寝床、今風にいえばリニア状の敷地は、経験の浅い２年生にはちょっと難しいのではないか……といった私の予想を見事に覆したのが吉良君の作品である。吉良君の設計主旨にもあるように集合住宅にしかないコモンスペースがあるべき姿を求め続けた結果は、見事にまとめ上げられ、図面表現を含めてこれほどまでに隅々までに配慮が行き届いた作品は見あたらなかった。
敷地の高低差を巧みに利用し、駐車場と一棟おきに地下階に居室を配している。このことが北側からの立面図に気持ちよいリズムを醸し出す因となっている。また、集合住宅棟の両端には地上１階へ通じる階段が配され、コモンスペースへのアプローチができるようになっているところが憎い。

松井　理恵



住戸の平面構成、立面構成いずれを見ても良く考慮されていて隙がない。
敢えていうならば、住戸の１階に設けられたコモンスペースは、具体的にどのように活用されていくのだろうか？　集合住宅に居住する人たちの生活を予想して使われ方を考える、否、集合住宅に居住する人たちにコモンスペースをこんな風に活用してもらいたい、といった吉良君の具体的な提案があったなら、多少無機質的に感じられるこの作品に生命が吹き込まれ、さらに良い作品になったのではないだろうか。

松井　理恵
進化の中に温存される原形
今回､課題の敷地周辺を歩くと、小さな路地や坂が、入り組んでいることに気づく。これらの坂には、趣深い名前が付けられており、そこには、それぞれの歴史と情緒が秘められている。
まるで時代の流れに逆らったかのようなこの地域は、都心部に位置しながら、日本元来の姿を残し続けている。つまり、私達に求められているのは、都市と下町の融合、進化の中に垣間見る原形の素晴らしさということなのである。
今回の敷地は、全体的に坂に囲まれた土地といえる。このことを利用して都市型集合住宅としての、存在感と多少の圧迫感を与えるため、全体をせりあう２つの山に見立てた。そして、山と山の間の谷の部分にオープンスペースを設置した。また、配置図を見ると分かるが、梨木坂－炭団坂の通りは、オープンスペースを通り抜け川の流れを連想させるものとなっている。
山をイメージした建物の屋根がつながっているのは、住まい手に集合住宅特有の連帯感、安心感をより深く感じてもらうためでもある。さらに、このコミュニケーションが、オープンスペースを利用することでより深まることを望んでいる。

指導＝小川　守之

今までの矩形から一変して今回は、二本の道に狭まれ、細長く高低差のある特殊な形の整地が与えられた。良いことは、敷地のコンテクストを読みとる（“敷地の声に耳を傾ける”）という、とっかかりの大事な作業に全員が否応なく取り組まざるを得なくなった点だろう。そのわりには、集合の単位を１つ２つ考えて、それを敷地に沿って繰り返し並べただけの案が目立った。
松井さんは、敷地に対して斜めに交差する道を見つけだし、そこにプラザを作った。そこを中心にして、端部に向かって迫り上がる、二つの敷地なりの細長いヴォリウムを設定した。
これを全体の枠組として、次に住む人の家族構成を一つ一つ設定し、それぞれに異なる住居単位をこの枠組の中にあてはめていく。その時に必要となる光や風の通る道としての中庭や、空きのスペースを丁度エメンタール・チーズの穴のように、このヴォリウムに穿っていった。敷地の特異性を読みとって、それを素直に形にするという、全体から部分へ降りていく作業と、一つ一つの家族のための空間を自分なりに一つずつ作り上げていくという、部分から全体へ上がっていく作業、この両方向の地道な作業を、唐突な飛躍や曖昧さなしに行っている所に好感を持った。